

西川の

こんな本あります⑬



今回紹介するのは物語ではなくノンフィクション。

TV番組で耳にする「法医学」や「監察医」。生きた人間ではなく、死んでしまった人間を診察・診断する医者。もうすっかり耳に馴染んだ職業になりました。この言葉が世の中で認知されるきっかけを作ったのがこの本の作者、御年九十歳を超える上野正彦先生。彼が全くメジャーでない目指した理由や、キャリアの中で出会った印象的な死体について語られています。14歳の世渡り術のシリーズ。

『死体が教えてくれたこと』

上野正彦著

三〇年間東京都監察医務院に勤め、訳二万体の検死解剖をされた著者。彼が法医学を学ぶことを選んだのは死ぬとはどういうことかを知るためだった。虐待死、交通事故死、過労死、相対死。様々な遺体の声を聴く。死せる人と向き合い、雄弁な死体からの声を決して聞き漏らすまいと体中の神経を研ぎ澄ました。

【死】を通して【生】を考える。



「死はナッシングだ」と考えていた著者が、飼い犬を亡くした時、思わずあの世を考えたという話が印象に残りました。辛く悲しい詩の話ではなく、死を通して、自らの生を考え、大切に生きてほしいというメッセージ十代向けに書かれたものだけれど、だからこそ読みやすいですよ。